ながら校舎を一回りして何事も無い事を取りそのままゴロリと横になり出たのか暑さも忘れグッスリと眠っい経ったのか、なんだか生暖かいッと吹いてきたのを感じて目が覚る音がかすかに聞こえるだけの静かているのに生暖かい風が吹いてき見ると暗闇の中から一人の少年が た。起き上がろうとした先生は大声 したがそれは悲鳴に近かった。をペラペラとめくって恨めしそうにいた先生は声が出なくて見つめるていた少年は何時の間にか姿を消りこんだ先生は暑さも忘れてガタガ夜が明けて何時ものとおり生徒達

不事を職員朝礼で報告しようと思っなかった。その日は一日中仕事が手兎かなと思ったりした。誰かに話し

か笑い
くれな
そげな
ので、
ず」と
先生の
ろう、
勝手な
言う声
の松川
ら言っ
の勢い
笑い
に色々
ること

思いますが。

ですが、先輩や小使いさんは何時と限ることではない武者ということでした。

回くらいでしたが、われわ先輩に頼まれると断れずにただ、宿直の旨味は代直給料より多く稼ぐ独身の

と寝る前の十一時頃までで以後になることもありました。

けていまはない北側の木造っ廊下を右に廻るところがい顔をした十二単か、血だいうことでした。また、廊に大きな手がニュッと出て泥棒に出くわすこともある